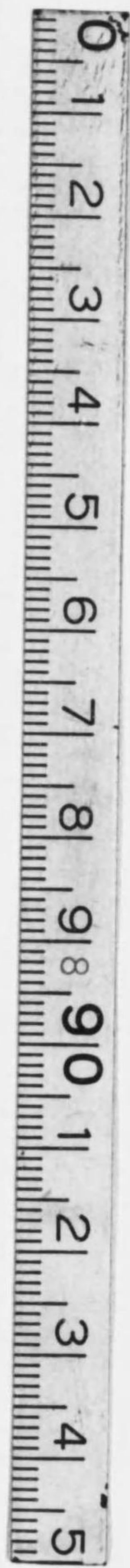


特242

921

慈雲尊者法語

因果無人



始





（藏院德了版大） 筆御者尊雲慈



本篇は、高井田長榮寺所藏の古寫本に依て之を出
す。明治廿八年開版の活版本法語集に、三世因果
乘元と題する一篇を載す。彼此對見するに、義趣
本同なれども文句出沒あり。又彼は文語體にし
て、此は口語體なり。又此篇は元と二席の法話な
れば、此本は二席各別に記せるに、彼本は合して一
篇と爲し二席の區別を示さず。此本大に勝れり
とす、故に今是を取る。



慈雲尊者法語

因果無人

智度論に、

一切世間法、唯因果無人、除假說故有、此是正思量。

と云ふ偈がある。

是は本佛のお説きなされた偈じや。夫をば龍猛菩薩のお引なされた。但是の四句にて三世因果を説き盡してある。因に是を説きまじやう。

一切とは。諸法をおつ束ねた辭じや。上有頂天より下阿鼻地

獄に至るまでひつくるめて是を一切と云ふ。世間と云ふは。衆生しゆじやうの此こゝに死しし彼かれに生なじて、生死しじ海かいに流轉りうてんすることじや。世間は梵語ぼんごでは路迦ろきやと云ふてくらやみのことじや。是の世間に地獄ぢごく餓鬼がき畜生ちくじやうがある、阿修羅あしゆらが有り、諸天しよてんがあり、人間じんげんがある。是をおつ東たひねて一切世間と云ふ。法と云ふは。軌持きぢの義ぎのり法度ほつどのことじや。

是の人間世界をいはい。男女なんによ大小だいせう貴賤きせん尊卑そんひがあり、親子おやこ兄弟けいだいがあり、君臣くんしん夫婦ふうふがあり、自身じしんがあり、他身たしんがある。君たる者は上に立て、萬民ばんみんを安樂あんらくにする。政まつらひをなし、其臣そのしん下たる者は君に事つかへて忠義ちゆうぎをばげまし、子こたる者は父母ふぼに孝かうを盡つくし、父母ふぼたる者は子こに教たづねをなして善ぜんにうつらす。弟ていは兄けいの教たづねにしたがひ、兄けいたる者は弟ていを導みちく

等らう。乃至乃至男女なんによ大小だいせう貴賤きせん尊卑そんひ、皆みな夫々それぞれの禮儀らいぎ法式ほつしきが有ある、是等これらをさして都みやこて世間よこの法ほつと云ふじや。

諸天しよてんを云はい。先づ今日こんにちに明あきかに見みゆる所の日月星辰にちげつせいせんを、佛經ぶつぎやうの中なかに是こゝを遊空いうくう天てんと説といてある。此こゝは須彌山しゆみせんの半腹はんぶくに當あたつて、虚空こくうの中なかに住すまして居ゐる天てんじや。俱舍論くしやろんなどに説といてあるに、須彌山しゆみせんの高たかさが十六萬由旬じゆじゆん有あつて、地ちに入いることが八萬由旬はつまんじゆじゆん地ちを出いることも八萬由旬はつまんじゆじゆんじやとある。此こゝの説せつに依よれば、日月にちげつ天てんまでは是こゝの世よ界かいからは四萬由旬しよまんじゆじゆん上うへじや、四天王しよてんわうなども同おなじことじや、須彌山しゆみせんに依よつて半腹はんぶくほどに住すまして居ゐらるゝ。此こゝ四天王しよてんわうより又また四萬由旬しよまんじゆじゆんを過すぎて帝釋天たいしやくてんがござる、此こゝが須彌山しゆみせんの頂上ちやうじやうじや。是こゝに三十三天さんじさんてんがある、帝釋たいしやくは其主そのしゆじや。これ迄まは皆みな地居ぢこ天てんと云ふて、須彌山しゆみせんに依よつて住すま

して居る。其上に六欲天がある。これ迄を總て欲界天と云ふて、皆婬欲食欲睡眠欲等がある。是が世間じや。此諸天の中には男子も女人もある。壽命の長短があり、尊卑貴賤の別もある。其初めの遊空天などは、人間の五十年を以て一晝夜として、五百歳づゝ壽命を持つものじや。三十三天などは、又人間の百年を以て一日一夜として、千年づゝ生きるさうじや。此の通り段々上ほど壽命も倍する、果報も亦至つて勝るゝものじやとある。是等のことを總じて世間の法と云ふじや。又此欲界天を過ぎて、上に四禪天と云ふが有る。欲界などは果報が又々倍増するとある。此上に又四空天がある。第一を空無邊處と云ひ、二を識無邊處と云ひ、三を無所有處と云ひ、四を非想處と云ふ、一切衆生の生死に流轉する所は、

こゝに極まつたものじや。是等を名けて世間と云ふ。其四禪天は一切梵天王のござる所じや、此梵天の中には男女もない、勿論婬欲食欲などは名も聞かぬ、唯禪定に依つて住して居る處じや、始めて此男女の愛欲を厭ふて、欲界の煩惱を解脱して、覺觀相應して、法の差別を分別するを初禪の梵天と云ふ。此覺觀も實に是れ苦なることを知つて、欣上厭下の方便を修して、漸く此處を解脱して、但喜受相應するを二禪の梵天と云ふ。此喜受も實のことでない事を知つて、次第に厭患して、初めて此所を解脱して、但遍身に禪定の樂みを受くるを第三禪天と名く。是も亦厭患すべき所なるを知つて、一切皆遠離して、乃至出入息もなく、苦もなく、樂もなく、但捨受相應するを第四禪天と名く。是を過ぎて上が無色界じや。此は

是の色法も前滅後生し前滅後生して實に是大苦なることを合點して此色報に於て大厭離を發して始めて自身が此色報を解脱して虚空と平等一體に成つて住するを空無邊處と云ふ。漸々に思惟してこの虚空も亦識の轉變なることを合點して又此虚空を遠離して但識のみに成つて住するを識無邊處と云ふ。此識も亦苦なることを知つて無所有に住するを無所有處と名く。また此の無所有の想念を厭ふて但微細の想念のみになるを是を無想天と云ふ。一切の外道は此處を解脱なり涅槃なり大安樂究竟の處なりと思ふて樂つて此處を勤求する。總じて是等をおつ束ねて一切世間法と云ふ皆生死界じや。

唯因果無人と云ふは。唯とは唯但の二字は餘縁を借らずと云

ふて外のまじり物の無いことじや。因とはものゝ種子となるものじや。五穀などで云は、去年のもみだが因じや、今年の米が果じや、去年のもみ種の中に今年の苗もなく種子もなく、今年の穂の中に去年のもみ種は決定してないものじやが今歳春初めて種を下ろした時秋のみりは既に決定したものじや。唯因果のみで別に米の實體と云ふものはない。又柿の木で云は、花盛り等は因じや、次第に増長して菓に成つて熟するを果と名くる。此木の中を割て見ても其花は一向不可得じや。花をどのやうに割いて見たと云ふても菓はねからない但此木が有るに依つて花がさく、花が有るに依つて菓を生ずる、生ずるに因つて次第に熟するに至る、唯此因果のみで別に柿の實體と云ふものはない。人間界で

云は、始めて三歸を受持して、佛法僧の恭敬禮事すべきことを知る。是が正しく人間に生ずる所の因じや。前生に此因があるとき必ず此生人間一期の色心を得る。此が果じや。是等を總じて因果と云ふ。無人とは。此一切世間は唯此因に因つて果を生じ果が又因と成つて又未來の果を生じ、輪轉端なく唯業相の影法師ばかりで、別に人間と云ふ實體はないことじや。かう計りでは合點が行くまい。總じて此人間界に生ずるには、三歸五戒が因じや。茲に人があつて、此生で三歸五戒を受持したと云ふても、死んでから後人間に生ずるやら、天上に生ずるやら、一向知らぬものじや。又今人間に生じて居るけれども、何に因つて生れ来たやら知れぬものじや。なせならば、此あれば彼あり、彼あれば此あり、彼は此が爲に

因となり、此は彼が爲に因となる。雲布けば雨を施し、雨降れば草木が成長する。唯是れ業相の影法師のみで、別に人と云ふ實體がない故じや。これを無人と云ふ。若し實體があつて、死する時目からか鼻からか脱け出て、三歸五戒の功德を持つて、人間の腹にやどる者なれば、過去世のなを知つて居る筈なれども、元來實體のないものじやに因つて一向知らぬ。元來實體が無いに依つて、過去から来て現在に生ずる者もなく、現在から去つて未來に至る者もない。但三歸五戒を受持した者は、必ず五十年か三十年か、人間の一期の果報を得るじや。微塵も相違せぬものじや、是を唯因果無人と云ふ。

又此人間にも至つて愚痴な者がある。父母師長に恭敬禮事す

べきことも知らず、世間の是非善悪も辨へず、男女大小の禮儀をも知らぬ者がある。此心が直に畜生じや。此心があるに必ず姿形の有るものじや、あさましきこと畜生界の身を得たものじや。又一類の者が有つて、朝より暮に至る迄、どかく己れがものは惜み蓄へ、他の財物は取り貪り、常に積み貯へて、一針一草も人に恵むことの嫌ひな者がある。此者の心が直に餓鬼じや。心の有處として形のないと云ふことは無いに因つて、必ず餓鬼の色報を得たものじや。又國王大臣の儔ひの者は、自己の威勢を憑んで、濫りと多く殺害するものじや。又國王などばかりでなし、一切の凡夫の有様として、どかく己が心に叶はぬことは、父母三寶等にも瞋恚心起して、惡口罵辱する者がある。甚しき者は、打たゝきをもする者が

ある。又甚しき者は、父母師長などを殺す者もある。此瞋恚心が直に地獄界じや。此心の有處は必ず姿形の有なる故、地獄の銅炎猛火を出現し來つたものじや。此貪瞋痴に因つて、種々の惡業を造る時に、一物昭々靈々たる者があり、死する時に其惡業を持つて、目から鼻から去つて、地獄か餓鬼か畜生かへ生ずる者じやと思ふては、又大に違ふたことじや。夫じやが因果の業相は、條理が微塵も違はぬ者じや。誤つて會する者は、此生へ過去のことを知らずに生れるに依つて、但松茸か竹の子の出來るやうに、ひよつと出たものじやと思ひ、是に由つて斷見を起すやからがある。又天地の氣を包んで、自己の心となすと思ふて居る者もあるじや、是に由つて因果を撥無する。悲むべきことじや。斯に一人の獵

師が有て、鐵砲を以て一つの鹿を打つ時に、其玉が鹿に當つて、遍身に大苦痛を受けて倒れ死す。もと此一切衆生は平等々々なる者じやに因つて、此鹿と人とは、一とも云はれねば、異とも云はれぬ者じやに因つて、互ひに相感じて縁起相續する者じや。其鹿も誰れ斯うしたと云ふことは知らぬけれども、怨恨の心は彼獵師の心中に止る、又其獵師が病死でもする時、獵師の身中を普く穿鑿しても、其鹿を打つた所の悪業は、微塵も不可得じや。此形と云ふ者は、但是れ膿血等の不淨ばかりで、焼ば灰埋めば土になつてしまふものなれども、所作の悪業は微塵も相違せぬものじや。若其惡人が三歸などの餘の善根があつて、たとひ人間に生を受ても、必ず短命なものじや。胎内で死するか、出生して後死するか、どかく其所作の業

は、喻ひ百劫を経ても、微塵も相違せぬものじやと有る。是を因果無人と云ふ。如是過去の過去際を盡し、未來の未來際を盡して、因果相續して斷絶せぬものじや。此三世の因果は、唯現今の一念心中に具足して、微塵も違はぬものじや。其れじやが、若し一念心中に何ぞ有る物じやと思ふたら、又大に違ふことじや。

x
x
x
x
x

一切世間法、唯因果無人、除假說故有、此是正思量。
昨晚も云ひましたけれども、略說で有つた故、重て説きましやう。
一切世間法と云ふは、上有頂天より、下阿鼻地獄に至るまで、おつ束ねて一切世間法と云ふ。

因果とは、此因は物の種となるものじや、果は物の熟したることじや。近く譬へて云は、子供の時手習ひするに、其筆に墨をつけて「い」の字を書くに、左の方に一つ牛の角に似た物を書く、是が因じや。右の方にも又一つ牛の角に似た點をうつ、是が果じや。此因果を離れて別に「い」は無い。左の點も「い」の字では無い、右の點も「い」の字で無い、勿論其筆墨の中にも書いた手の中にも「い」の字は無い。それなら畢竟して龜毛兎角のやうなものかと云ふに、さうでは無い。筆に墨のついて、左に牛の角に似た物を一つ書き、右に一つ書くこと、どこへ書いてもきつと「い」の字じや。子供が讀んでも「い」の字なれば、大人が讀んでも「い」の字じや。それなら「い」の字の實體がなんぞ有るかと云ふに、元來此「い」の字は生せぬものじや、畢竟微塵計

りも不可得じや。是を因果無人と云ふ。

人間で云ふても其通りじや。先づ三歸五戒を受たと云ふても、其善根が有るやら無いやら、人間に生ずるやら、どこへ生ずるやら、身も知らねば心も知らぬものじや。其善根が身の中にも無い、心の中にも無い。それなら畢竟むだごとかと云ふに、さうでは無い。是三歸五戒を受たものは、死ぬる時必ず苦痛が少い。苦痛が少いに由つて、心も自然に歡喜する、自然と正しうなる、其時に必ず人間相應の中有が現じたものじや。其時現在で三歸五戒を護持した心と云ふ物が一物有て、此生から去つて中有に生ずると云ふでは無い。したが又其外に中有と云ふ物も無い。既に人間相應の中有が現ずると、自心の業因縁に随つて、次の生に生すべき所の國が

目にかゝる。さうすると又た一郡が目にかゝる。此一郡の中に
於て村と云ふか町と云ふか自心の生すべき縁有る所許りが見え
る。次第に轉變して村の中にもあれ町の中にもあれ自心が生ず
る所の家ばかりが見ゆるやうに成つてくる。さうすると其家の
中にも但其父母許りが見ゆるものじや。たとひ心には願ふても
願はいても是非に目にかゝる。已に父母が目にかゝると云ふと、
若し前生で男子の業を造つた者は母に於て親しみの心が起り若
女人の業を造つた者は父に於て親しみの心が起る。この心が一
念ちよつと起つた時既に中有を離れて胎内へ落在したるものじや。
已に胎内に落在すると増上したうても、したうなうても是非に増
長したものじや。さうすると若し因縁さへ無ければ生れたうて

も、生れどもなくとも、十月かそこらの日數を満すると是非に出生
したものじや。既に生ずると次第に成長して、五十年か三十年か
人間界に住する是が三歸五戒の果じや。夫なら過去からのなん
ぞ昭々靈々たる者が在て生じ來つて五十年三十年の果報を受て
居る者かと云ふに、さうしたものでは無い。生者も無い死者も無
い來ることもなく去ること無い、作者も無く受者もない、如此因
果報應は畢竟して生せぬものじや、生せねば滅せぬものじや、是を
因果無人と云ふ。ちやうど「い」の字を書くやうなものじや。筆に
墨をつけて紙にぬらくつて、左に一つ牛の角に似たものを書き、右
に一つ書くと直に「い」の字が出来たものじや。さうすると、どこへ
もていても「い」の字じや、學者が讀んでも不學者が讀んでも、少しも

違はぬことじや。それなら、なんぞ「い」の字の實體がある者かと云ふに、右の點にもなく左の點にも無く、紙にもなく筆にも無い、畢竟不可得じや。此「い」の字元來生せぬものじや、生せねば滅せぬものじや、これを因果無人と云ふ。既に人間世界にちよつこりと生れると夫なりでは居らぬものじや。成長したうても、しともなくとも是非に成長せねばならぬものじや。少年かと思ふとはや壯年になる、壯年かと思へば直に老年になる、壽命業に随つて盡く、かくの如く念々次第に轉變流注して暫くも住せぬものじや。少年の時に早生れた時の姿形は一向不可得じや、壯年の時少年の色心は一向無い、老年になると壯年の色心は一向不可得じや。是じやに因つて、具に云は、い、去年の姿形と今歳の姿形とは違ふものじや。

昨の色心と今日の色心と違ふてある筈じや。但凡夫と云ふものは、心相が龜動な故知らぬばかりじや。形ばかりで無い、心相も亦さうじや。子供の時の心は中年には無い、中年の心は子供の時の心では無い、乃至老年の時に壯年の心は無い。壯年の心が少年の心を知らぬ、少年の心が壯年の心を知らぬ、乃至老年の心が壯年の心を知らぬ、壯年の心が老年の心を知らぬものじや。老年の心が死位の心を知らぬ、昨日の心も今日の心を知らぬ、今日の心は昨日の心では無い。誤つた者は、少年の心が移り來つて壯年になり、壯年の心が移り來つて老年の心となり、此心が又死ぬと覺てゐる。さうしたことでは無。それじやが、少年の色心は壯年の色心の爲に因となり縁となつたものじや、壯年の色心は乃至老死の色心

の爲に因となり縁となつたものじや、昨日の色心は今日の色心の爲に因となり縁となつたものじや。少年の色心は元來生せぬものじや、生せねば滅せぬものじや、畢竟實體は無い事じや、是を因果無人と云ふ。此人間相應の五尺の色心に思量分別の有るは、此れは但過去世で三歸五戒を護持した善業に因つて現じたものじや。乃至老死の心も元來生せぬものじや、中年の心に因つて現はれたものじや、昨日の心も滅せぬ、今日の心も畢竟生せぬものじや。それじや、昨日の心が因となり縁となつて、今日の心が現じたものじや。それならば、畢竟じて實體の無いもので、龜毛兔角の如きことかと云ふに、さうしたことでは無い。現に見よ、子供の時習ふた「いろは」も、死ぬる迄役にたち、子供の時讀んだ大學も、死ぬる迄能く

憶持してゐるものじや。それなら、なんぞ一物昭々く靈々たる者が胸の内に居て、きつと記憶してゐるか、と云ふに、皮を剥ぎ肉を去り、骨を碎き髓を叩き、五臟六腑を穿鑿しても、但是れ臭穢不淨じや。是を因果無人と云ふ。是が今日かくの如くなるのみならず、未來の未來際を盡しても、是の如く相續轉變したもののじや。それなら、なんぞ一物が有て相續するか、と云ふに、畢竟して但因果無人じや。夫じやに因つて、今日の者でも實々に大願を發じて、吾決定成佛して、一切衆生を利益しやうと誓願すると、此願は決定成就するものじや、廓然大悟せねばならぬ。見よ、佛在世の時、蓮華色比丘尼が過去世で不調法な願を發されたに依つて、佛世に生れ遇ふて、大羅漢に迄ならるゝ程の人なれども、在俗の間に種々の難に遭はれた。か

う云へば、發願したれば、何ぞ一物昭々々々靈々たるものが有て、其願を以てゐるやうに思ふか、さうではない。此中に一點も無い、生々の處に相續し來つても、此中に一點も無い。是を一切世間唯因果無人と云ふ。

又今日の者が目で物を見て、よいじや悪いじやとは云ふことを分別するが、是も人々皆違ふものじや。犬の目と人の目とは又大に違ふものじや。犬の目は花などを見ても、綺麗なども思ふものでは無い、ごもくなどを見ても、きたないと思ふものでも無い、金銀七寶を見ても、犬の爲には何でも無い物じや。人が又物を見ると、文字のわけも知れる、綾羅錦繡の好悪も明かに見ゆることじや。同じ人の中でも、女人の目と男子の目とは早違ひがある。もと世

界の初て成立した時には、男女の差別は一向なかつたことじや。其時に衆生の心相が次第に轉變するに由て、境も又轉變したものでじや。轉變するに付て、兎角よい事は少くて、惡業が増長したものでじや。心は境界に随つて轉變するもの、境は心を追て轉變するものじやに因て、衆生の惡心が次第に増長するに付て、この食物迄おとろへて、終に五穀を食するやうに成り來つたものじや。既に此五穀を食すると腹中にかすが残る、かすが残ると夫なりではをらぬ、必ず外へ漏れねばならぬ、此かすが漏れるに付て、大小便が出來る、之に由て男女の姿が分れて來たものじや。其時に衆生が互ひに相見て、親近の想を生ずる、其内に能愛の心が勝れたものは男子の姿となり、所愛の心の深いものが女人と成つた。そこで、男子の

眼根は見て愛を起し、女人の眼根は見られて愛を起す、乃至耳鼻舌身等も是に準じて解するがよい。もと是但過去の善悪業に因て、同く肉血が聚集し來つたものなれども、既に男女の形が分れると、女人は丸こかした、所愛の心と相應して現じたものじや。男子なれば一切の諸根が丸こかした、能愛の心と相應して出現したものじや。乃至微細に云は、身の五臟六腑毛孔迄も皆違ふ筈じや。五根が此の如くなれば、意根も又其通りじや、男子の意根は無量劫來能愛の心と相應して、まづ勇猛強剛じや。女人の意根は無量劫來た、所愛の心と相應して柔順なじや。夫なら何ぞ女人の眼根じやと云ふて、格別な物があるかと思へば、たゞ是同じ肉血の聚集して眼根となつて現じた物じや、畢竟じて實體はないことじ

や。男子の眼根じやと云ふても、別に一物が有て、能愛と相應すると云ふでは無い、是も又々實體の無いことじや。男子の心じやと云ふても、冬寒く夏は暑いに極つたことじや。女人の心も、冬は寒く夏は暑い。更に別事はなけれども、相待すると能所がわかれ、種々の事が出來てくるじや。夫じやが心相は元來不可得じや、本より此方生せぬものじや、是を唯因果無人と云ふ。

又今日の者が、ちよつと風をひくと、目も違へば鼻も違ひ、舌に觸れる味ひも違へば、身にふれる寒熱も違ふ。鼻がつまつて香がせなんだの、口の味も苦くなつたりする。此等の事は今日な□□□□

□□しひものでも、自心の覺が有ることじや。勿論心相も違ふてくる、脾胃肝膽迄も皆違ふ内の五臟がそこねると、外の顔色も變る

二六
こどが有る、音聲も變れば筋脈も皆かはる。夫じやに由て名醫が見ると、色を見ても聲を聞ても病が知れると云ふことが有る、乃至起居動靜を見ても病源を知ると有る、夫じやが病じやと云ふても格別の物が有て、外から來るものでは無い、皆不養生より起つたものじや。風寒濕熱か、食事の過不及か、思慮の過たのか、又諸餘の不養生からして起るものじや。別に病の起り處と云ふて極つた事は無い、病の實體も本來不可得じや、畢竟生せぬものじや、生せねば滅せぬものじや、是を因果無人と云ふ。夫じやが此病と云ふものも不思議な物じや、此病が相續すると、此に病神と云ふものが出來ることがある。昔晋の平公が大病であつた、其時に、秦の國に醫緩と云ふ名醫があつた、平公が是を召された。其醫緩が來る前晚

の夢に、二人の童子が出て物語りをするに、明日は名醫が來るに由て、こゝに止つて居たら、吾等も恐くは害せられん、是はどかく早う逃れたらよからうと云ふたれば、一人の童子が云ふには、夫は仕やうがある、膏の上旨の下に隠れたら、針灸醫藥も及ばねば、たとひ名醫じやと云ふても、何の恐るゝには足らぬと云ふて去りし夢を見られた。平公もふと目が覺て、さてこそ不思議なことじやと思はれた。其翌日果して醫緩が脈を見て、此は病が膏旨の間に入た故、不治の性じやと云はれた、果して間もなう平公も死なれたと云ふことが、左傳の中に有る。總じて此病と云ふものも、畢竟實體の無いものなれども、相續すると病の神が生ずるやうになる。それじやが、此病神が風寒濕熱の中にも無い、四大の中にもなし、眼耳鼻

舌身乃至意五臟六腑の中にも無い、一向不可得じや。元來此病神
の來り處は無いたとひ病氣がよくなつたと云ふても、此病神が去
てどこへ行と云ふことも無い、元來實體は無い。是を一切世間の
法は唯因果無人と云ふ。夫じやが、是病神が出來ると病が重うな
る、病が重くなるると病神がいよ／＼強くなつて人をも取り殺す、一
人殺し二人殺すと、段々増長して傳屍病となる、其ものが死んだ遺
物の衣服をもらうても、其病が傳はることがある、是等の事が無い
と云はれぬ。又天地不順の氣に由て、人が煩ふものじや、一り煩ひ
二人煩ひすると、疫病の神が出現して、一郡一國にも漫ることがあ
る、是等のこともないと云はれぬ、それじやが、病神の實體を求むる
に、微塵計りも不可得じや、唯是因果無人じや。

人間もさうじや。元來平等々々にして、一切衆生と自己とは、一
とも云はれねば、異とも云はれぬものじや。手前の功德かと思へ
ば、一切衆生の功德じや、一切衆生の佛性かと思ふたら、直に自己の
佛性じや。男子でもなければ、女人でも無い、佛でもなく衆生でも
無い、迷ひもなければ、覺りも無い、作者もなく受者も無い、去もなく
來もなく、生者も無く滅者も無い。過去の過去際から、未來の未來
際を盡して、畢竟じて違はぬことじや。夫じやが、一切衆生が一念
心所愛と相應し來るとは、や女人の色心が緣起したものじや。一
念心能愛と相應し來ると、直に男子の色心が出現したものじや。一
既にかう男女の色心が緣起すると、女人は頭上から脚下まで女人
じや、男子は頭上より脚下に至る迄男子じや。鬻體などを見るに、

男子と女人とは、頭骨のつきそ違ふてある骨になつても違ふじや。かくの如く男女が分るゝと、諸根の作用も皆格別に成て現じたものじや。夫なら男女と云ふ實體が有るかど云ふに、畢竟して夢の所見の如くじや。

世間の夢と云ふものが不可思議なものじや、親子兄弟枕を並べて寝てゐても互ひに相知らぬ。夢の中に、男女大小山河大地草木叢林を出現するが、男子計りが自心かと思ふたら、親子兄弟男女大小も悉く自心じやつた。衆生ばかりでなし、山河大地草木叢林も皆自心じや。男女大小が實の無い許りでなし、山河大地有情非情をおつ束ねて、皆實でないことじや。此夢の譬の如く今日の山河大地有情非情も、皆自己の一念心の中に現じたものじや、是を唯

因果無人と云ふじや。一切の衆生はかくの如く自心の所現なることを知らぬ、無量劫來此夢に於て實有の想ひをなして、種々の顛倒妄見に隨順して、自ら此生死界に流轉したものとじや。先づ此男女が相對すると、此中に種々の煩惱を現起して、地獄餓鬼畜生を出現したものとじや。次第に轉變して、無量の生死海が出現するが、畢竟たゞ夢の所見の如くじや。人の夢に色々の事を見るけれど、此夢の中には一法も不可得じや、生とも云はれねば滅とも云はれぬ、唯是因果無人じや。又此善惡の業と云ふものも、夢の所見の如く、元來實體の無いことなれど、世間の衆生が次第に相續すると、此中に善根を植る者は少く、惡業に隨順する者は至つて多いことじや。次第に此惡業が増長するに因て、今日の如き五濁惡世になり

來つたものじや。又是が次第に増長すると、此惡業から衆生の果報が滅じて、小の三災が起り、乃至後には大の三災が起つて、此世間が悉く滅してしまふとある。人獨りのことで云は、惡業の者はどかく命終の時に諸根が散亂して、心が正しくないものじや。又其苦痛も至つて強い、手足なども顛ふて、どかく安らかに無いものじや。是等の人は必ず三惡趣に入る相じやとある。若又善業の者は、命終の時心相が正しうて歡喜する者じや。たとひ夫迄の病はどのやうに有ても、命終の時は必ず安樂な。諸根が怡悦するに由て、外から見ても死相がよい。此者は必ず善所に生ずると有る是等のことが毫厘も違はぬ、本來實體無うして是の如くじや、此を一切世間の法唯因果無人と云ふ。

總じて一切の諸法は本來實體が無く、本來生せぬに由て滅しもせぬ。山河大地は山河大地で自性解脱してゐる、男女大小は男女大小で本來解脱して居る、過去は過去で解脱し、未來は未來で解脱し、現在に現在で解脱したものじや。佛世尊がこゝを見なされ、て男女大小の中に於て、解脱の大道を教へなされたのが姪戒じや。出家で云はふならば、上佛種を繼いで、下人天の師範となるものじや。夫じやに因て、内外ともに清淨になければならぬ。男子にも過がないもの、女人にも過がないもの、各これ自性解脱したものなれども、一切凡夫は男女相對すると、無量の煩惱業相を出現したもので、染汗心を以て見ると、早眼根の汚れとなる。染汚心を以て音聲を聞くとは、や耳根の汚れとなる。香を嗅ぎ言語を交へる。

乃至身根意根に至るまで、皆悪業相汚穢不淨の行相となる。夫じやに因て、佛世尊が出現なさるゝと、必ず本來清淨解脱の行法を、教へなされたものじや。若此法性に背いて犯戒破戒すると、五臟六腑迄も、清淨の法と相違して、染汚愛着の姿となり來る。此内の五臟六腑からして、言語を吐き身行を動する、乃至六根門頭に觸れて、一々の作業が染汚惡業ならぬことは無い。夫じやに因て、清淨持戒の人が見ると、必ず知れることじや。この惡業を以て法を聞いては、身に入まぬものじや、心に徹せぬものじや、勿論佛種を紹隆することもならぬ、人天の上にて福田となることもならぬ、これが佛の知見で、姪戒を制しなされた所以じや。又在家は人間の當り前を云へば、男女がある筈のこと、男女があれば、夫婦も出來る筈のこ

と、夫婦が出來れば、其中に又天地位し陰陽するに因て、義理道理が出現する。此義理道理は人間の當り前じや、此義理道理に背くと、人間の當り前の道を失ふに由て、畜生などの因となるじや。肉食する者も其通りじや。この色心を養ふに、清淨に養へば清淨になる、不淨に養へば不淨になる。この魚鳥の肉、鹿猿の肉などは、それぞれの肉血の餘分じや。是を以て養へば、五臟六腑迄が不淨汚穢になるに由て、乃至六根も不淨汚穢の作用を發する。夫じやに因て、法を修行しても身に入まぬ、心に徹せぬものじや。是に因て出家たる者は、禁じねばならぬことじや。上佛種を紹ぎ下衆生を濟度するには、清淨になければ、叶はぬことじや、遠く云へば、大慈悲佛性を斷ずる因縁となるじや。在家の者は、生きたものを殺し食

三六
せぬやうにするがよいことじや、是等の因縁を具に云へば長いに
因て略する。

又實を云はし。佛世尊出現なされて始めて此戒法をこしらへ
て人に授けなされたものでは無い、一切衆生の佛性が本來是の如
くじや。是を佛が知見なされて一切衆生の爲にお説きなされた
分のことじや。夫じやに因て實々に志を起して佛の如く修行
すると決して佛と同じやうに廓然として大悟せねば叶はぬ筈じ
や。若し實の如く合點するとは是非にかういかなば叶はぬことじ
や。夫をば知らずして今時相似の佛法類が云ふには、此事を合點
したらば去就自在じや、何事をなしても妨げぬ、逆行順行も共に解
脱の大海じやと説者が、稻麻竹葦の如くじや。是等の事を佛が邪

見の衆生じやとお説きなされたが、さだかに云へば天魔外道じや、
ひいきして云ふても憐むべき凡夫じや。此類の者が今時世間に
彌綸じてある實に悲むべきことじや。若實々に大願心を起して
修行すれば、十人が十人、百人が百人ながら、皆廓然大悟せねば叶は
ぬことじや。古じや今じやと云ふて、何も別事はない、たゞ發心が
僻むに由てさういかなぬ分のことじや。諸佛と云ふは何の事なれ
ば、自己の一念心の異名じや、諸佛の禪定三昧と云ふは何の事なれ
ば、自己の一念心の異名じや、乃至一切の諸法をばおつ束ねて、たゞ
これ自己の一念心の異名じや。此の如く諸法は一念心の中に具
足して、微塵も缺めが無い、此五蘊色心が直に是れ佛の法身じや。
それじやが、元來此一念心の中には一法も不可得じや、衆生も無け

れば佛もない、迷ひも無ければ覺りもない。夫で金剛經の中に、一法の得べきが無い、是を阿耨多羅三藐三菩提と名くると有る。これを一切世間の法唯因果無人と云ふ。

除假說故有と云ふは。此五蘊色心も、今日の者が思ふには、自身があり他身があり、内があり外があり、有情非情があり、各差別して相待すると云ふと、何ぞ一物あるやうに見ゆるけれど、假にも實體の無いものじや。たゞ是因果の業相のみじや。一念心慳貪になれば、是が直に餓鬼界じや。一念心瞋恚を起すと、是が直に地獄界じや。一念心愚痴に轉すると、此が直に畜生界じや。かくの如き三惡趣も、唯是れ空名のみじや。喜もなく愁も無い、得もなく失も無い。是を假說の故に有なるを除くと云ふ。

如是きは正思量と云ふは。正思量とは禪定智慧のことじや。此の如く徹見すると、地獄の中に諸佛の無生智が出現する。餓鬼の中に諸佛の法身が出現する。畜生界の中に般若波羅蜜門が出現する。是を正思量と名くるとじや。

313
73

因果無人終

昭和二年二月廿五日印刷
昭和二年三月一日發行

編者	京都市下京區八條院町廿八番地 長谷寶秀
發行者	大坂市西區大寶寺町西之町十三 落合伊三郎
發行所	大坂市西區新町通四丁目 財團法人佛教奉仕會
印刷者	京都市下京區西洞院七條南 內外山版株式会社印刷部
代表者	須磨勘兵衛

終